

評議員をお引受するに当たって

小 口 高（地球物理研究施設）

この度、この重要な時期に、まったく思いもかけず評議員の大役を命ぜられまして、正直のところ、いまだに戸惑いを禁じ得ない状態です。現在、極く身近な所だけとって見ても、理学部の理学院への改組やこれに伴う組織の整備、関連する学科の再編、理学部集中化構想、新キャンパス問題など、私どもの将来の研究体制に直接関わる重要案件が山積していることは理学部の皆様のつとに御存じの通りです。理学部が直面している理学の研究教育体制だけでなく、現在、日本のあらゆる分野で組織の見直しや改革の機運が高まっているように思われます。研究や教育の体制を考えるには100年の計を要することは言うまでもありませんが、現在の体制が基本的にはおよそ100年ほど前にできあがったと云う事情や、戦後の変革から数えても既に40年を経て、その間の学問のめざましい進歩などを考え合せば、あらゆる分野で改革の機運が熟して来ているのはむしろ当然のことと云うなずかれます。

私どもが直接に関係する理学の研究教育の面に限っても、従来の研究分野にとられない境界領域に大変な勢いで新しい分野が生まれ、発展を遂げつつあります。更に大きくは、理学、工学の境界すら必ずしも明確とは云えない状態になりつつあるようにも思われます。このような時期に100年を見通したプランを考えるのは至難の業と云っ

ていいでしょう。全てを直ちに理想の姿にまとめるのは極めて難しいと云わざるを得ません。しかし、ことは急を要することもまた明かのように思っています。

科学研究が好むと好まざるにかかわらず次第に巨大化して行く風潮の中で、人目を引き、あるいは手っとり早く成果が期待でき、また実用性が高いなどの理由で巨大化に適した分野にのみ重点的に全てが集中していくのは理学の研究にとっても教育にとっても健全な姿ではないと思います。理学の研究が未知なるものを明らかにして行くことに価値を認めるものである限り、理学部、あるいは理学院が将来にわたって考えられるさまざまな領域について、第一級の先端的な研究の場となり、将来を担う若い人たちの教育の場になるのであればわが国の科学研究の将来を論ずることは不可能と云っていいでしょう。

研究と教育とは関係する大学の研究者のみならず、技術系、事務系全ての人々を含む組織全体の有効な改革が必要と考えます。ここに含まれるさまざまな問題を、理想に近い形でまとめて行くために、学部長を助けて出来るだけの努力を傾けたいと思います。力不足ではありますが理学部の皆様方の御協力を頂きながら責任の一端を果たさせて頂ければ幸いです。